

北社会ニュースオウ9号

2012年2月28日

発行者： 鈴木壮夫



(1) 2月28日(火)開催 第296回 北社会

講師： 大井龍司氏 (高10回) 今年選出された新しい同窓会長

テーマ：こども達のために「こんな病院があったらいいな」が愛子に実現

上図は彫刻家「佐藤忠良氏」がふるさと宮城の病氣と闘うこどもたちのためと熱い気持ちを含め、ほぼ一年半を要して制作したブロンズレリーフ「おおきなかぶ」で2003年に開院した宮城県立こども病院の入り口に飾られております。ロシア民話に基づいて、忠良さんが描いたこのお話は、1962年に福音館書店から発行されて、ほぼ半世紀小学校の教科書にも載り、日本中のこども達に愛されてきました。おじいさん、おばあさん、まご娘、犬、猫、ねずみが「うんとこしょ、どっこいしょ」とちからをあわせておおきいかぶを引き抜くという、この楽しい絵本は、こどもたち、みんなが大好きなお話です。

こども病院の壁を飾るのにはぴったりなものだと元・絵本編集者の妻が語ってました。ですから、忠良せんせいのご好意で大井さんの夢が叶えられ、「おおきなかぶ」に恥じない素晴らしいこども病院に成長させなければという大井さんの思いを強く感じます。

(3月4日(日)NHK ETV 8:00 日曜美術館に収録)

今夕は高10回生に多数ご参加いただきましたので右の写真を掲載しました。右が大井さん、左が石垣秀生さんです。お二人とも二高の二年生の夏、場所は軽井沢です。1956年8月、NIPPON JAMBOREE。

硬式野球部が磐城高を3-1で勝利し、甲子園出場を決めた直後でした。お二人には本当にお世話になりました。



末尾に余談：私の長女は忠良先生に憧れ、東京造形大学彫刻科に進学、同級生に二高卒がいて応援歌を唄わされた。その男は昨年12月発行同窓会報一頁のタノタイガ君です。

川越からふるさと“仙台”を想う

鈴木壮夫

大学進学のため、仙台を離れ上京したのは1960年、もう半世紀も経ってしまった。そんな過去の土地であるにもかかわらず、而も70才を過ぎても仙台は心の奥底から懐かしい。精神的に育てていただき、仙台はわたしの価値観の原点でもあります。

「白河以北、十把一絡げ」という言葉をご存知でしょうか。福島県の白河より北の東北地方はどれもこれもあまり価値のない地方だと中央から卑下されていたのです。

ですから、仙台で青春を過ごした若者の価値観は「反中央・反権力」でした。卒業した仙台二高の仲間はもちろん今でもかけがえのない友人達です。ふるさと仙台、首都圏での会合は今でもほぼ毎月開催され、在校当時の前向きに闘う姿勢、不屈の精神、思いやり、そして独り善がりかもしれませんが青春時代の気高い人間性を維持しようと多くの仲間が口には出さず、心深く決意して、エールを交換しあうのです。楽しく、多くの同窓生の心の支えになっております。そんな、会合の都度、避けては通れない一つの覚悟が皆の中に存在しておりました。それは、死ぬまでに大きな地震が必ず起きるだろうということでした。巨大地震、巨大津波がふるさとを直撃した東日本大震災から一年になろうとしております。仲間の覚悟をはるかに超えた未曾有の大震災がもたらされました。最近いただいた被災地・南三陸町の写真集にこんな言葉が掲載されておりました。

「悪い夢なら覚めてほしい。皆がそう思った筈だ。町並みはどこへ行った。緑はどこへ行った。人々はどこへ行った。生まれて初めて自然を恨んだ。」被災地の写真を見ると目頭が熱くなります。わたしは手打そば屋を経営しております。被災地の人達を助けたい、励ましたいと思っても物心両面での余裕が乏しく、現地に向かう時間を作ることができないのです。それでも、石巻へは行けました。数時間の滞在でしたが、工場・倉庫を流された高校の同期生が案内してくれました。それまで、新聞やテレビで被災状況はそれこそ毎日毎日目にしていました。でも、自分の目でガレキの山に遭遇した時、言葉は出ませんでした。思わず車中で手を合わせ黙祷しました。オレだったらどうするだろうか、立直れるだろうか、支えあう仲間は何人いるだろうか、とても苦しくなりました。

案内してくれた同期生は次のように語ってくれた。「地元の復興への熱意は強く、高く東北人特有のねばり強い忍耐力を持って再起を期している。社員とともにガレキと戦い老骨に鞭を打って、会社再建に努力している。」と。一年近く経った今でも、多くのものを失って苦しんでいる人達は多いし、変わり果てた光景が広がったままだ。

そして、人災とも言うべき、原発災害は収束の道のりがはるかに遠く、放射能汚染は深刻で、いわれのない風評を撒き散らしている。でも、途方もない混乱に被災地の方々は全力で立ち向かっている。希望を捨てず、屈することもなく、懸命の歩みを続けている。仙台だけでなく、東北人には長い歴史の中で培ってきた助け合いの精神が脈々と受け継がれているとわたしは思っている。災害が大規模だったにもかかわらず、人々のところは荒廃していない。苦難に直面している今こそ長い復興の道のりを、絆を大切に少しずつ前に進んでいただきたい。今自分にできること、ほんの僅かなことでも応援していきたいと思いつける日々です。ふるさとの復興を願ひ続けます。

大学

(桜の開花の頃、川越市で開催されたふるさと仙台の
70プログラムに原稿提供あり、2次を3回にわたって)